
リリカルでマジカルな世界に砂漠妖怪

黒ぷりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルでマジカルな世界に砂漠妖怪

【Nコード】

N0844BA

【作者名】

黒ぷりん

【あらすじ】

リリカルなのはの世界に転生しました。

しかし転生した場所は物語に関わりの無い砂漠が広がる世界でした。

プロローグ

人生とは何が起こるか解らない。

例えば学校に遅刻しそうになりパンをくわえて走っていたら美少女やイケメンにぶつかり言い争いになりそいつは実は転校生でしたとか、そんなキャツキャウフフなコテコテの恋愛ゲームのテンプレ人生になるかもしれない。

またはいきなり異世界に放り込まれて、落ちた先に美少女またはイケメンが居てそいつと共に魔王を倒す旅に出るついでにキャツキャウフフするという人生も……

しかしながらそれには落とし穴があり、イケメンや美少女でなければ物語が始まらないという罠も存在しているのだ。

ちなみに俺はどこにでも居そうな普通の顔立ちでやや陰気なイメージがつきまとっている。

まあ転生という奥の手もあるが、俺みたいな人種は残念な事にヒロインとかとキャツキャウフフできない

せいぜいモブキャラが限界だな。

目立つと死ぬ。

……先ほどから何が言いたいのかと言うと、どうやら俺は死んだようだ。
死んだ事によるショックは無かったが、突然の事でテンパっている
のでとりあえず現実逃避しているのである。

「そろそろ良いか？」

あ、どうぞ。

現実逃避から戻ると目の前に少年が居てニヤニヤしながら「丁寧に
も死因を教えてくれた。

どうやらこのガキンチョが神様のようだ。

ちなみに死因は、ゴキブリに驚いての心臓マヒを起こしたと、我な
がら情けない死に方である。
しかしネタにはなるな。

天国とかで、あー！ゴキブリに驚いて死んだ人だーって美少女天使
に言われたり……止めよう、なんか涙が出てきた。

「暇つぶしで殺した
転生させてやるから俺を楽しませろ」

よくある二次創作みたいに謝らないんだな。
まあ、よく考えてみると当たり前の事だ、何千何億という生命体の
1個体でしかない俺を気にかける事は無い。

ん……？

つーか、何言ったこの神様？

「えーと、つまり貴方のミスでは無く暇つぶしで俺は殺されたと？」

「物分かりが悪いな、さっき言っただろ？
さっさと転生しろ」

……なんだこの神様、俺をゲームの駒としか考えて無いのか？

ていうか特典とか無いの？

「ああ、ちなみに特典は死ぬ前に見ていたアニメや漫画の能力や装
備だ

サービスで魔力もくれてやる」

死ぬ前つーと……砂ぼうずの漫画を読みながらガンソードのDV
D見ていたっけ。

「っ」か思考読めるんだ流石神様。

「お前……器用だな」

「いや、アニメは垂れ流しですよ」

「まあ良いか、それで転生しろ
んで楽しませろ

物語が終わったら好きにして良いぞ」

説明は終わりだと言い神が親指をビシッと下に向けると足元が無くなり俺は自由落下を始める。

驚きのあまり声を出せずに落ちる俺

転生する世界とか場所とか他の転生者とか色々聞きたい事があった
のだが残念ながら視界が暗転して意識が朦朧となった。

あ……容姿どつちですか？

できれば童帝か鬼いさんを希望したいのですが……

「OK判った、砂ぼうずメインでいくわ」

神様なんて居なかった。

プロローグ（後書き）

ついやってしまった後悔はしていない

転生したからといって主人公と絡むとか夢物語

転生という体験は初めてでどうなる事かと心配だったが、特に障害も無く五体満足で転生できた。

とはいえ赤ん坊の頃の記憶はほとんど無く、気が付いたらいつの間にやら転生していたというのが正しい表現かもしれない。

一つ残念だった事は母親のふくよかな胸囲に吸い尽いたりさわったりする記憶が無い事だな。

別に俺は鬼畜や畜生では無いので実の母親に欲情はしない。

いや、肉親だとしても巨大な山脈があれば一回くらいは拝むのが自然の摂理というものだ。

うん、俺は悪くないな、悪いのは豊かな果実をこさえた母親とこんな思考をするようになった俺だ。

……悪かった、どうやら俺が間違っていたようだ今のは忘れてくれ。

まあダラダラとここまで思い起こしたのだが、問題はどのような世界に転生したのが重要な事だったな。

俺が転生した世界は魔法と科学が融合した世界、リリカルでマジカルなアレの生活だ。

原作知識は殆ど無い……というか記憶が欠落しているようで前世の記憶がほとんど無い。

デバイス、管理局、魔法生物などのキーワードで何となくだがリリカルなのは世界だなと理解できた。

……やっぱ前世はそっち方面の人間だったのか？

【……来たぞ】

おっと、獲物が来たようだ。

話は中断するが、現在狩りの最中だったりする。

幸運な事にリンカーコアがあつたので念話ができるし魔法も使える。
というか使えないと生きていけない世界だったりする。

ちなみに俺のポジションは、砂に潜って待ち伏せからの奇襲がメイン。

獲物が来たら、魔力弾をぶち込む簡単なお仕事です。

……嘘だ、実は初めて正面担当になりました。

そんな無駄な思考を巡らせていると俺が潜っている所まで影が差した。

スコープ出して確認すると巨大なトカゲの化け物がゆっくりと近付いてくるのが見える。

獲物が一步を踏み出すたびに地響きで俺の身体をビリビリと撫でる。
いや、俺が震えているのか？

指がじんわりと痺れて鼓動が早くなってくる。

ヤバイな、俺ブルってる。

【おい、しくじるなよ？

久しぶりの獲物だ、そろそろ肉が食いたいんだよ】

俺が返事をしない事を不振に思ったのか仲間の一人が喋りかけてきた。

というかイライラしていた。

失敗したら俺が食われる物理的な意味で。

【りよっ了解】

俺は怖気付いた心に喝を入れ深呼吸、そして獲物の位置を確認する。

……距離10メートルって所か、そろそろ仕掛けた方が良いな。

【三秒後に仕掛ける】

【OK、へますんじゃねーぞ】

わかってるっつーの！俺だってハラペコだ。

【……3】

先ずは背中のウインチに魔力を込め

【……2】

愛用しているデバイスのグリップを握りしめ

【……1】

身体に力を込める

【……0!-!】

俺は砂から勢い良く飛び出した。

「砂漠の神と今日の獲物に感謝を込め、乾杯！」

『乾杯!』

リーダーの声と共にガラスがぶつかり合う音が響き、宴が始まる。

結論から言うと狩りは成功して、俺達は飯にありつけた。

俺が放った魔力弾は獲物の足に命中し獲物が転び、仲間達が魔力弾の雨を振らせて終了。

ジュージューと肉汁滴る良い焼き肉になり俺の腹を満たす。

「よぉ〜クー坊、お手柄だったなあ!」

髭面の熊ようにデカイ酔っ払いが絡んできた。

「ちょ！重い！」

ゲンさんそのクー坊つての止めてくれよゲンさん！」

この酔っ払いの髭面はゲンさんと言って、俺の師匠にあたる人物だ。俺が活躍したのが嬉しいのか豊かな髭をこすりつけてくる。

……チクチクしてくすぐつたい酒臭い重い、やたらとスキンシップが激しいので実はこの人そっち方面の人なのではと思ってしまう。まあただ単に息子のように接してくれているだけだと思うが……いや、思いたい。

「ガッハッハ！」

俺は嬉しいぞー！！」

別の意味でくすぐつたくなってきた。

つかクー坊はやめてくれ恥ずかしいたぶん止めないと思うけど。

「ゲンさんが教えてくれたからだよ」

「嬉しい事言ってくれるじゃねーか！」

よし、ここは俺の感動の舞を披露せねば……！！」

ゲンさんは更に機嫌が良くなったのかそのままのテンションで踊りだした。

それに釣られて他の酔っ払いも踊りだす。

「なにこのカオス……」

原因は俺なんだが、とりあえず酔っ払いは放置して、冒頭の話の続きでもするか……

……俺が転生したのは砂漠が広がる世界だった。

この世界では水やら植物が無く、代わりに魔法生物と言われる生き物が生息していて、水や食料はその魔法生物を狩る事で獲ることができる。

ちなみに、その魔法生物を狩る事を生業としたのが、俺たち狩猟民族だ。

で、肝心のデバイスだが、驚いた事に独自改良されたデバイスだった。

待機形態は大きなリュックサックで、寝袋やら生活必需品が入っている。

バリアジャケットを展開するとまんま砂ぼつずになる。

砂ぼつずがわからない？ゲゲれ。

とりあえず簡単に装備を説明すると各種センサーやスコープが内蔵された金魚鉢みたいなヘルメットに日傘を被せて、野戦服を着込み背中にはワイヤー式のロケットウインチを背負い、魔力弾やダメージを数回発防げるマントを羽織っている。

……このマント某海賊ガンダムのABCマントじゃね？

ん？ABCマントって何だ？前世の記憶か？

なんか強化フラグとかあるのかね？

ちなみに他の仲間も同様の装備で、並んで歩くと実にシニールである。

手持ち武器はそれぞれ違っていて、俺の場合はショットガンだった。おそらく原作意識だと思う。

機能については追々だな。

目下の問題は俺が何時の時期に転生したのか、そして半裸で突進してくるゲンさんにどう接したら良いのかという事だ。

まあ前者は原作自体もほとんど覚えていないし別次元なので、介入は無理じゃね的な流れになっているがな。

後者はもう泣きたくなってくる。

酔った勢いで掘られるのでは無いのかとガチで思ってしまう。

っーかこっち来んな！

「うおおおおクー坊ううううう！！！！！」

「ぎゃあああああ！来るなあああああ！！！」

ともかく比較的平和な世界に転生できて良かったよ。
今は地味にピンチだけどね、主に尻が。

転生したからといって主人公と絡むとか夢物語（後書き）

筆者の知識もほとんど無いので、色々調べていますがなかなか上手く書けません

獲物を探していたら襲われている金髪を見つけた

俺達狩猟民族の朝は早い

日が昇る前に装備を整え外出する。

まあ寝袋畳んでリュックを背負っただけなんだけどね。

ちなみに俺達が住んでいるのは岩場にある洞穴だ。

外敵から身を守るといいうのもあるが、涼しいんだよねここ。

普段は日が昇ってから起きるんだけど、今日は見回りの当番なんだ。

おや？そこに居る熊みたいにデカい男は……

「おはようゲンさん」

「おお、クー坊！」

やっぱりゲンさんだった。

というかクー坊やめてくれと……まあ言っても無駄だから諦めた。

今日はゲンさんと一緒に見回りかな？

「今日はゲンさんと一緒に見回りだっけ？」

「いんや、今日はクー坊一人で見回りだ

俺は西方面を見ってくるからお前は東担当な」

この前の狩りで認められたのか、最近一人行動が多くなってきたな。
しかし東方面か……

「東かー、あそこ地面が少ないから移動が辛いんだけど」

「俺に似てウインチの使い方は下手くそだしな
まあ、これも経験だ」

クツクツと意地の悪い笑いを漏らしながらゲンさんはバリアジャケットを着込み崖から飛び降り砂に飛び込んだ。

「……ゲンさん、あんた面倒なだけでしょ？」

幸せが逃げそうなくらいため息を吐いて、俺は東方面へと歩きだす。

今更だが、俺たち狩猟民族は砂や地面に潜れる事ができるんだ。

まあ一種のレアスキルみたいなもんだ。

移動も非常に楽で、魚のように砂や地面の中を泳ぐ事ができる。

……欠点は砂にしか潜れないという事だ。

ちなみにゲンさんが向かった西方面は砂漠が多く能力を使つての移動には最適である

見回りもほとんどデバイス任せなので往復だけで良い。

「……グチグチ考えても仕方がないな」

俺もバリアジャケットを展開して、背中のロケットウインチに魔力を込める。

ゲンさんも言っていたが俺はあまりウインチ……というより魔力の制御が上手くできない。

練習は毎日しているがどうも……つか、教えてくれるのが制御が得意じゃないゲンさんだしなー

まあともかく射出だ射出

背中からワイヤーに取り付けられたフックが勢い良く飛び出し十メートルくらいで魔方陣を展開、空中で固定。

「いくぜ！」

ワイヤーを巻き戻す力で空中に身体を投げ出す。

「ヒヤッホー！」

そのままターザンよろしく巧みにウィンチを操作して空中を進んだ

「…………ら、本当に良かったんだけどねー」

何回かは成功したのだが、射出のタイミングを失敗して今はテクテク岩場を歩いています。

まああのまま進んでたら魔力切れるから節約にはなるな

……言い訳じゃねーし、襲われたら嫌だから魔力温存するんだし飯に襲われたとしても俺は逃げる、誰かが襲われたら考えるがな。

「おっと今のはフラグじゃねーぞ」「うわ……………!!!!」

言うより早く轟音と悲鳴が聞こえてきた。

どうやら隣にある巨大な岩山の向こう側から聞こえてくるようだ

「……ツチ」

糞がつー！

美少女じゃなかったら助けねーぞー！！

ウインチに魔力を込め射出、一気に上空へ舞い上がり岩山の向こう側を確認する。

そこにはアルマジロみたいな魔法生物に襲われている金髪の……

「……あれ？男？女？どっち？」

糞がつー！！

助けて確認しないと駄目とか……なんだよアイツ。

管理局の魔道師か？

「おいその金髪！助けてやるから助け賃な！」

「ええ！？」

金髪の返事は聞かず、銃をアルマジロに向けて発砲。

散弾型の魔力弾がアルマジロを襲い、小規模な爆発が起こる。

「とつー！」

アルマジロが怯んだ隙にフックの固定を解除、地面に降りる。
目の前には金髪、……なんだ男か。

「グオオオオオオオオオオオ！！！」

悪態一つでも吐いてやろうかと思ったが背後から咆哮
やっぱ硬いわあのアルマジロ

「うるせえ！！」

ともかくけん制の為に数発魔力弾をぶちこんでおく。
まあこれは時間稼ぎみたいなもんだ、その間に後ろの金髪に指示を
出す。

「おい金髪、拘束系の魔法は使えるか？」

「うつつん使えるよ」

「おk、あのアルマジロ拘束してくれ」

「……わかった！」

言うや否や緑色の鎖がアルマジロに絡まり動きを封じる。
あれデジャブ……

「んなことよりも」

連射を止め、銃に魔力を込める。

「砲撃……いや！！」

後ろで金髪が何か言っているがそんなのは知らん。

「くたばれ！！」

貫通力の高い徹甲弾タイプの魔力弾を発射しアルマジロを穿つ。
数秒の沈黙の後、アルジロの眉間に穴が空き悲鳴のような咆哮を上げ絶命した。

「ふう……今日の食料確保」

「ええ！？これを食べるの！？」

そういや少し前に来た管理局の奴らも言っていたな
まあ食えるものっつーとコレしか無いし食料援助とか個人的に気に
食わない。

それに……

「そのままにしたらコイツに失礼だろ？」

「失礼って、ともかく助けてくれてありがとう……ええっと」

金髪が何かを言いたそうに口をパクパクさせている。

……ああ、そういう事ね。

「クーゴ、クーゴだ」

「クーゴ……僕はユーノ、ユーノ・スクライア
改めて助けてくれてありがとう、クーゴ！」

「あ、ああ……」

そうか、このデジャブ感は前世の記憶だったのか……
まさかこんな形で原作キャラと遭遇する事になるなんて思っても見

な
か
っ
た。

獲物を探していたら襲われている金髪を見つけた（後書き）

時系列とかは次話で判明します

食い物につられたのは金髪だが墓穴を掘ったのは俺だった

前回のあらずじ、美少女のような美少年「ユーノ」を助けて恩を売ることになった。

ついでに食料を手に入れてご満悦だったのだが……

「ああん！？金が無いだあゝ！？」

「ごつごめん……お金は持ってきてないんだ」

正直盲点だった。

まさか魔法で転移してきたとは思っていなかった。

てつきり宇宙船が何かで移動してきたのかと思っていたが……嫉妬するくらいマジ優秀

さてどうしたものかと思っていたら……

グウウゝ……

ユーノの腹が景気よく鳴り響いた。

「……ツチ、しゃーねえな」

「え？」

あつけにとられているユーノを置き去りに獲物を担いで来た道を引き返す。

少し進んで振り向くと、ぼーっと突っ立っているユーノが見える。

「ついて来い、飯ぐらいは食わせてやるよ。
……話はそれからだ」

「え？……うん！」

状況が理解できていないが食欲には勝てなかったようだ。
うれしそうに俺の後を付いてくる。

クッククク……これで恩は更に売れた、仲間の所に戻ったらたんまりと報奨金を請求してやる！

あ、ちなみに獲物は魔法で軽くしている。
運搬用の魔法だけどけっこう色々な事に応用できるんだよねー
っ！か、コイツ人を疑うって事を知らんのか？
まあどうでも良いか、騙しやすいし。

（二十分後）

何事も無く到着、相変わらずの洞窟で安心した。
そんな短時間で変化したら困るけどね。

「ここが俺達の住処だ」

「へえー……昔の遺跡をそのまま住処にしているのか」

ユーノが壁をさわり関心したようにうなずいている。
っ！かココって遺跡だったんだ。

とりあえずバリアジャケット解除してデバイスを待機状態にする。

「あ……クーゴって黒髪なんだ」

「ん？ああ、この世界では黒髪が多いな」

「へえー」

納得したように相槌を打ち、俺の姿をジロジロを見つめてくる。
なんか……恥ずかしんだけど。

「ま、まあともかく飯にするぜ」

「うん！」

……コイツ本当に男か？
なんか地味に可愛いと思っただぞ。

そんな事を思っていたら、周囲が暗くなり野太い声が聞こえてきた。

「クー坊、どうやら面白い奴拾ってきやがったな？」

「うわっ！ー！」

突然の事で飛び上がるユーノ

ちなみに俺はその声に聞き覚えがあるので視線をゆっくりと上げた。

「ああ、ゲンさんどうだった？」

「どうだったじゃねーよ、コイツは何だ？」

「そいつはユーノって言って……」

戸惑うユーノそっちのけで俺は先ほどの経緯を説明した。
ついでに腹が減っていたので掟に従ってユーノに飯を食わせるとも伝える。

ちなみに掟つてのは狩猟民族が結成された時からある掟で、そのひとつが『腹が空いた奴を見かけたら食わせろ』という意味がわからない掟だ。

ちなみに逆らうと天罰がくだるらしく破った者は居ない。

色々と言っていたが実際に神を見た俺としては天罰が怖いってのが一番の理由だったりする。

「ふーむ、まあ大丈夫か……ユーノ君と言ったかな？」

「はっはい！」

「クー坊と協力して獲った獲物だ、遠慮せずに食うんだぞ！」

ゲンさんはしばらく思案顔だったが、急にぱつと笑顔になり俺の獲物を受け取ってガッハツハと大笑いしながら奥へと入っていった。

……よし、上手い具合に旨い飯にありつける。

ゲンさんの料理って本当に旨いんだよねー

今日は原作キャラに絡んだり運が良いな。

「……んどうしたユーノ？」

「うっん……何でもないよ」

となりではポケーっとゲンさんが去った方角を見つめているユーノ。
まあ色々あって呆然としているだけじゃねーかな？

「まあ適当にすわってるよ」

「あ、うん……おじゃまします」

その後しばらくユーノと適当に雑談して時間を潰していた。

話す内容は、ユーノの身の回りとか時期の確認とか、まあつまり原作がどれくらい進んでいるのかを意識して会話してみた。

正直、原作に関わることはしたくなかった。

それなりの付き合いはしてみたいが、まあそれくらいだ。

命を危険にしてまで原作に関わりたくは無い。

まあとりあえずジュエルシードを見つけた事ぐらいしか判らなかった。

時期的には無印が終わった所かね？

たしか見つけた直後に輸送船が事故に遭ってユーノが地球に行ったから、こんな偏狭の世界に来てるって事は無印が終わってちよつとした空白期に突入したんだろ。

「ー事は、今後の交友で原作に絡めれるかどうかだな。」

そんなの面倒だし神を楽しませるだけだしぶっちゃけどーでも良いんだが。

まあそんな事を思っても消されないって事は何かしら絡むことにはなるんだろうな。

「ところでさ、好きな子居んの？」

「ええ！？」

とにかく色々疑問が解決したので本題に移ろうと思う。

ちなみに俺は原作のなのはとユーノの関係に疑問を持っている。

良い雰囲気だと思うんだが、何故にくっ付かないのかと常々不満に思っていた。

なので人生の先輩としてアドバイスなんかを

まあ前世含めて彼女なんて居なかったんだがな！ハハハ！

……ハア

というかいちいち反応が初々しいのう……意地悪しなくなっちまうぜ

「僕、いつも図書館で調べものしたり発掘だけだったから……」

あれ？反応が思ったより薄いな

……なんか嫌な予感がするんだけど。

無印終わってるよね？

「おーい！飯ができたぞー！」

「お、おう！」

行こうぜユーノ！」

「あ、うん！」

地味に嫌なタイミングでゲンさんから声がかかる。

マズイな、もしも原作手前の出来事なら大変な事になるな……

ともかく飯だ、考えるのは後回しにしよう。

ユーノを連れて奥の部屋へと向かう。

「わぁ〜」

「流石ゲンさんだ、うまそうだ」

「ガツハツハ！褒めてもなにも出んぞ」

部屋に入ると良い匂いが広がってくる。

大きなテーブルに二人分の料理が並んでいる。

てかユーノ、お前この肉が……いや、言うのはやめておこつ。

ちなみに料理はビーフシチューみたいなもんだ。

野菜は植物系の魔法生物、スープはたまに来る管理局から調味料を貰っている。

肉は先ほどのアルマジロもどき、食った後にネタバレしますかね。

「煮込む時間が無かったからな、肉は焼いただけだ」

「いえ、とても美味しいです！」

「……」

ゲンさんと仲良く喋るユーノそっちのけで黙々と食べる俺。

いや、食事中ってあんま喋りたくないんよ。

しかし旨いな、たしかに肉にはあまり味がついていないが、他の野菜にはきちんと味付けされて上手い具合にバランスが取れて飽きが

来ない。

「おかわりもあるから遠慮するなよ!」

「はい!」

「んじゃおかわり、汁多めで」

「お前は遠慮しろ!」

ともかく俺とユーノはゆっくりと食事を堪能した。

「ごちそうさまでした!美味しかったです!」

「おう!うれしい事言ってくれるじゃあないか!ありがとよ!」

カラカラと快活に笑いゲンさんは食器を片付けに行った。
それを狙って、俺は気になっていた事を聞いてみた。

「なあ、ユーノ」

「ん?なに?」

「そつえばどうしてこの星に来たんだ?」

実は聞いてなかった。

発掘が終わった事は聞いたので、無印は済んだと思い込んでしまった。

俺の気のせいだと、祈りながらユーノの返事を待った。

「それは……」

俺の祈りは叶わずユーノの表情が暗くなる。
あれ？これガチでヤバくね？

「ああ、言いたくなかったら「いや、詳しく聞かせてもらおうよ」

しまった……墓穴を掘ってしまった。

俺の後ろにゲンさんが居て、鋭い視線が俺達を射抜く。

「あ、う……実は……」

視線に負けたのかユーノが途切れ途切れに改めて自分の事やこの世界に來た理由を話した。

まずユーノの出身だが、これは原作と変わりなく遺跡の発掘を生業とするスクライアー族の出身だ。

ココに來た理由は、自らが発掘したロストロギア「ジュエルシード」が事故によって散らばってしまい、

責任を感じたユーノは一人で回収を行う事にしたようだ。

そしてその一つがこの世界にもあり封印をすませて帰還する途中だった。

……が、アルマジロもどきに襲われ、俺が助けた。

最悪な展開だ、おそらくこれは神がいじくったせいだな。

「なんてこった……」

「やっちゃまったなあ……クーゴ」

「え？なに？え？」

俺は頭を抱え落ち込み、ゲンさんは呆れたように、しかし面白そうに俺を見つめている。

ユノはもう知らん。

まあ結論から言つと、俺は無印に関わらないといけなくなりました。

どっかの糞神様のせいだな！！！！

食い物につられたのは金髪だが墓穴を掘ったのは俺だった（後書き）

執筆中に原作を軽く見て絶望しました。

どうやって絡ませるか悩みましたが、無理矢理キツカケは作りませんでした。

次話は疑問の回収と旅立ちまで一気に進めます。

時と場所を選んでふざけないと大変な事になる（前書き）

ストーリーが無理矢理かも……

あとあんまり原作を読んで無いのでキャラクター崩壊しているかも
しれません
申し訳ない。

時と場所を選んでふざけないと大変な事になる

ユーノの爆弾発言の後、俺とユーノはリーダーの部屋へと連れて行かれた。

褐色の蔵ついおっさんが俺達を睨みつけている。

いや、正確には睨みつけているのでは無く、普通に見ているのだが、どう考えても睨んでいるだろあれ？

「さて」

「ひっ！」

思わずシオニーちゃんになっちまったぜテヘペロ

たしかこんな感じで使われていたような気がする。

あ、隣のユーノが怯えてビクビクしている。

小動物みたいで可愛いんだけど、……ツチなんで男なんだよ。

そしてその隣のゲンさんは呆れたように俺を睨んでいた。

あ、いや本気で睨んでいた。

「……クーゴ、お前ふざけているのか？」

「イエマツタクトンデモナイデスハイ」

ゲンさん超こええ………つか、いつの間にかクー坊って言わなくなってる。

そう考えるとなんかゲンさんに名前と呼ばれるのは地味に嫌だなー

「……別に怒っていないから楽にしなさい」

嗚呼、リーダーが優しい人でふざけていた自分を殴りたい。
まあ何回かやったネタなんで最初以外は毎回地味に睨まれているんだけど、今日は大目に見てくれているようだ。つーか緊張感無いな俺。

「さてクーゴ、君は掟の事は知っているよね？」

「はい、『助けた者は最後まで面倒を見る』でしたな」

「付け加えるなら『それが知らなかった事であつても』だ」

……誰だよこんな掟を考えた奴は？

神か！？あの糞神様なのか！？

つまり俺はまんまと神の掌の上で踊らされたって訳か。

「あつあの！クーゴは魔法生物から助けてくれたし美味しいご飯も……だから掟には」

そんな事を考えていたらユーノが口を挟んだ。

「だが君はジュエルシードというロストロギアの回収をしているそうじゃないか」

「うつ……でも！」

必死に食い下がるユーノ。

まあ巻き込みたくないってのが一番かな？

お優しい事で……でも、リーダーはそんなに甘くないぜ。

「一人で無謀だとは思わないのか？」

親は？仲間は？何故一人で危険な物を回収している？」

「……でも……僕が……」

ユーノの声がだんだん小さくなり最後はゴニョゴニョと聞こえない

……でもリーダーの言う事は正しい。

思えばどうしてユーノは一人で行動したのだろうか？

責任だけでそんな行動に移せるのだろうか？

……いや、それは俺の考えだな。

そう考えるとユーノは

「責任を感じたのは判る、だが勝手に飛び出すのはどうかな？

見たところ君はとても優秀な魔導師だと思う

だが、あまりにも無謀すぎる！

もしも君が大きな事故に遭って死んでしまったらどうするんだ！？

残された者はどう思う？

……私が言っているのはそういう事だ」

リーダーの話が終わった後、ユーノは黙り込んでしまった。

反省……では無いな、自分勝手な行動で迷惑を掛けたと感じているのだろうか？

そして見ず知らずの俺にまで……神様、アンタ最低だな。

「ともかくクーゴ、君は掟に従いこの子のジュエルシード集めを手伝いなさい」

「……はい」

「ユーノ君、色々思うところがあるかもしれないがクーゴと一緒に

連れて行ってくれないか？

じゃないと掟に従い、この子を追放しなければならない」

「……わかりました」

搾り出すように呟くユーノ。

表情はよく見えなかった。

「いい返事とは言えないね

まあ良い、今日はゆっくり休んで明日に備えなさい」

ニツコリと優しい笑顔をユーノに向けるリーダー

そしてちゃっかり晩御飯までご馳走するようだ。

「はい！」

その言葉にばつと顔を上げ返事をするユーノ

少し目が潤んでいるが、その瞳には何かを決めた決意が見える。

……なら、俺も腹括るしかねーなあ！！

「さ、話は終わりだ

クーゴ、君は旅の準備をしたまえ」

「了解！」

部屋全体に響き渡るように腹から声を出し、さっきまでふざけていた自分に喝を入れる。

そのままダッシュでリーダーの部屋をでた。
やってやるうじゃねーかコンチクショー！！
ロストロギアが何だってんだ！！

「あつちよつとクーゴ！」

背後からユーノの声が聞こえるが知らん。
とりあえず仲間達に旅に出る事を伝え、親にも伝えたら鉄拳が二発
跳んできた。

右から親父、左から母さんだ。

親父は基本無口なんで基本手から出てくる。

母さんは……なんだろう？

大事な一人息子だから……かな？

俺も掟があつたとはいえユーノの事言えないな。
ぜってー無事に帰ってやる。

そして夕方。

ワイワイガヤガヤと狩が成功したみたいに騒ぐ仲間達。

その中心にいるのはユーノと俺。

リーダーが気を使ってくれたのかそれとも……まあ、ユーノには思
い出にはなるか。

「クーゴ……あなたって子は、こんな可愛い子と旅に出るなんて」

シクシクとハンカチを濡らし、母さんが涙ながらに何か言っている。母さん……アンタ壮絶な勘違いしているぞ？つーかアンタ酔っ払ってるな！？

最初に男って説明しただろ！？

「ク……クク……その、なんだクー坊、幸せになれよガハハハ！」

ゲンさん……撃たれたいのかね？

クー坊って読んでくれたのは良いけど一回逝ってみるか？

「あの……僕は」

ユーノゴメン。

なんかゴメン。

……たしかお風呂回あったな、邪魔しないから楽しみめ。

「……クーゴ、お前は大事な家族だから無事に帰って来い」

なんか親父が喋ったんですけどー！？

地味に怖ええ……

「親父……」

「これは銭別だ」

親父はそう言っただけのリュックに軽く触れる。すると淡い光が溢れ、何かが流れ込んできた。

「これは？」

「俺が編み出した魔法よ
使えるかどうかはお前次第だ」

フツと笑い酒を飲み干し親父は自分の部屋へと帰っていった。
ありがとう、親父。

「なんだクー坊、親父から餞別貰ったのか？」

「ゲンさん……」

散々ユーノをいじり倒したのか、スッキリした表情でゲンさんが俺の隣へ座った。
しばらく何も言わず酒飲んだり飯を食っていたが、何か踏ん切りがついたのだろうか？

「ん！」

顔は真っ直ぐ前を見て、俺に腕だけ突き出した。
掌には十発の薬莢が乗せられており、俺がそれを受け取るとカランと金属的な音を奏でた。

「これは？」

「俺からの餞別だ、ピンチになったら使え」

そう言ったらゲンさんも自分の部屋へと戻っていった。
よくよく回りを見てみると、仲間の姿は無く俺とユーノそして母さ

んだけが残された。

ユーノはユーノで仲間達から応援されたり肉が入った包みを渡されたりしていた。

あの肉ってアルマジロもどきの肉だよな？

どう食えと？

まあともかくユーノには笑顔が溢れていたので良し。

ちなみに俺はノーマルだから別にユーノなんて気にしてないし
バインボインの女の子にしか興味ないし

……先ほどのシリ阿斯が台無しである。

おや、母さんがこっちに来た。
今度は何だろう？

「クーゴ」

「ん？なに？かあゝわぶっ！！」

俺は母さんに抱きしめられた。

特に掛ける言葉は無く、しばらくぎゅっと抱きしめていた。
そして無言で親父の部屋に戻った。

「……………」

「ゴメン……………僕を助けたばかりに……………イタッ！」

なんか隣に来てぶつくさ言っている小動物をはたく。

「なにすんだよ!!」

「掟だけで俺がお前の手伝いをすると思っただか？」

「……………え？違うの？」

うつ……………なんだその怯えたような気持ち悪いものを見る目は!？

「なんつーかな、どう言っただけ良いのかわからんけどさ」

「……………」

「困ったらお互い様って事だ

理由を聞いてそのまま放置して事故に遭ったりしたら後味悪いしな」

「僕はそんな事ないよ!」

「はいダウトー」

昼に助けられたのは何処のどいつでしたー？」

「うつ……………それは」

言葉に詰まるユーノを無視して、手を突き出す。

「まあそついう事だからさ、これからヨロシク!」

「……………うつん」

おっかなびつくり俺の手を握りユーノははにかみながら答えた。
それが俺とユーノとの出会いであり、俺が原作に突入した瞬間でも
あった。

時と場所を選んでふざけないと大変な事になる（後書き）

休日が終わったので、しばらく投稿期間が長めになるかもしれません。

次話から原作入ります。

主人公設定その？（前書き）

無印開始直前の主人公のステータスでも晒します。
次話から無印編開始です。

主人公設定その？

名前：クーゴ

年齢：12歳

魔力光：紅褐色

魔力：推定B

偏狭惑星に住む狩猟民族の一人

早い段階から独り立ちし仲間達と共に狩に出ているのでそこその実力はある。

しかし、魔力的な知識は我流に近いので、まだまだ未熟な部分が多い。

神様が勝手に決めた特典は死ぬ前に見ていたガン×ソードと砂ぼうずなのだが詳細は不明。

現在判明している特典は砂ぼうずの装備と砂に潜れる能力のみ。

また、砂ぼうずの主人公である「水野灌太」の性格をベースにしている為か、勝つ為や生き残る為には手段を選ばない、そして女性に弱い。

戦闘技能などは両作品から受け継いでいるらしく、特に射撃の腕前はメキメキと上達している。

現在の装備

多数のストレージデバイスを装備しているが、攻撃系のデバイスは一つ

バリアジャケットは野戦服（見た目はまんま砂ぼうず）
狩猟民族共通の装備なのでクーゴ専用とは言えない。

銃型デバイス（名称無し）

形はウィンチエスター M1897

発射方法は通常のショットガンと同じ
威力は込める魔力に比例して上昇する

魔法弾の種類は二種類、クーゴの意思で切り替えが可能
種類は命中率が高い拡散型の散弾と威力が高い貫通型の徹甲弾

徹甲弾タイプは消費魔力が高く発動までに時間が掛かるが飛距離は
長い

散弾タイプは発動時間が短く連射可能だが飛距離は短い

徹甲弾タイプの威力は散弾タイプ四発分（散弾がすべて命中した場合）

ゲンさんから手渡された十発の弾丸は今のところ能力不明

索敵用デバイス「零式ヘルメット」

砂ぼうずが装備しているヘルメットと同じ
各種センサーが豊富で情報戦に長けるが、主人公はあまり使い慣れてない

他の登場人物にかぶらせる事も可能

対魔力防御マント

おそらくガンソードから唯一の特典（というか砂ぼつずにもマントはあるので詳細は不明）

最大五発までの魔力系ダメージを防げる

クロスボーンガンダムのABCマントのようなもの

しかし砲撃系などは防げない

約一日を掛けて修復可能。

リュックサック型デバイス「ロケットウインチ」

空中移動用のデバイス

ワイヤーに取り付けられたフックを空中に飛ばして任意の場所に固定できる

ワイヤーを巻き取る力を利用して跳ぶ事が可能

燃費は良いはずだが使い慣れていないので非常に悪い

飛ばす方向は上方と左右と切り替え可能

また、待機形態は深緑のリュックサックになり他のデバイスもこれに搭載される

銃型デバイスはキーホルダーになり単体で使用可能

主人公設定その？（後書き）

まったく関係ないけど主人公なのに地味ですね。

だがそれがいい

お芝居は好きだがアクシデントは邪魔だから帰ってくれ（前書き）

思ったより早く書けました。
無印開始します。

お芝居は好きだがアクシデントは邪魔だから帰ってくれ

第97管理外世界……通称『地球』

ユーノ曰く、この世界に多くのジュエルシードが漂流しているらしい。

なんとなく懐かしい感じがするのはおそらく前世の記憶のせいかな？

記憶が曖昧なのは幸いだけど、とりあえず初見って感じに振舞うか。
うーむ、ボロが出ない程度に喋るのってちょっと緊張するな……

「植物の惑星か？異常に青臭いな……」

「いや、少し調べただけど文明的には発達しているらしいよ」

「ふーん……つー事は、適当に歩けば村に着くのかねえ？」

「クーゴ、君は色々勘違いしているよ？」

呆れたように、ユーノは地球について懇切丁寧に説明してくれた。
演技なんてした事が無かったけど、案外上手くいくもんだな。

というかやつぱ転移する前にこの世界の事は予習してるのねユーノ
マジ優等生。

こりゃ言葉を選ばないと厄介な事になりそう。

まあそのありがたーい説明は適当に流したがな。

そして頃合を見計らって話を区切り、適当に見回ろうと提案する。
ククク……我ながら上手い具合に事が進んでいるじゃないか。

これなら案外楽にジュエルシード集めができるかもしれない。

とまあそのような思案を巡らせつつ周囲を探索しているうちにちょっとした疑問が浮かんだ。

「そついや俺達の服装はどうなんだ？
不振に思われるのはなるべく避けたいんだけど」

前世の記憶があるとはいえ服装などはほとんど記憶に無い。
覚えている記憶も曖昧で、よくもまあ転生者だと言えるなと思えるくらいだ。

ちなみに地球に関して覚えている記憶は、大まかな所で言うと、ビルが立ち並ぶ町がある、車がある、学校などの公共施設があるなど基本的な事くらいだ。

細やかな記憶は他にもあるが、正直言つてまったく役に立たない記憶である。

「うーん……クーゴは大丈夫じゃないかな？」

俺の服装を上から下までじっくり見てユーノが答えた。

ちなみに俺の服装は深緑の作業着。

大きなリュックを背負っているので、遠目に見れば何かの作業員かな？

……という印象が持てれば幸いである。

ちなみにユーノはどっからどう見ても異世界人。
町を歩くと普通に補導されるレベル。

あ、いやそつち系の人たちに囲まれるかもね。

「という事はユーノはしばらく出歩けないな
金稼いでから服買つか？」

「あ、それは大丈夫だよ」

……うんまあ知ってた。

だが疑問を述べる事によって円滑な人間関係を構築するものだ。

「どゆこと？」

「僕、変身魔法を使えるんだ」

得意満面な顔で答えやがった。

効果音はもちろん、どやあ

糞がっ！！案外可愛いとか思っちゃったじゃねーか！！
なにこの小動物！？

「……お前、なんでそんなに嫉妬するくらい優秀なんだよ」

「そっそうかな」

「ぐっ……まっまあ、それならひとまず安心だな」

照れ隠しに適当に言ったら照れられた。なんか殴りたくなる。
っ！か何を根拠に安心なのだろうかね俺？

しかしこれからどうすれば良いんだ？

普通に考えればもう少して主人公なのはとの遭遇だが……

「
」

……その時だった。

背中を撫でるような、何か嫌な気配が俺達の周囲に満ちた。

「なんだ!？」

「これは……ジュエルシード!！」

いきなりかよ!？

この世界に来て数時間くらいしか経ってないぞ？

というか何かの気配がこっちに近付いて来ているようだ。

「おいおい……こっちに来てるぞ!？」

「ジュエルシードは、生物の強い思いに反応するんだ」

軽い説明をしてくれてるけど聞き流してバリアジャケットを展開する。

ショットガンを構えた時には説明が終わっていた。

ゴメン全然聞いてなかった。

つか昨日の夜に説明しろや。

ともかく原作と同様に強い思いを具現化させるビックリアイテムってところか。

発動したら生物を襲うとかはた迷惑な話だな。

「来る!！」

ユーノが叫んだ瞬間、正面の茂みを掻き分けスライムのようなドロドロの物体が出てきた。

先手必勝とばかりに魔力弾をぶち込むも穴が空くだけで効いていない。

「クソツ効かねえ!!」

「魔法じゃ駄目だ!このデバイスで封印しないと!」

ですよねー。

仕方ねえ、詠唱を邪魔されないように囷になるか。
更に銃を乱射しながら森の奥へと移動してスライムの注意をこっちに向ける。

「ちよっクーゴー!!」

「おらおら!こっちだ化け物!!」

【ユーノ、今のうちだ!】

「!!」

【わかった!!】

俺の意図が判ったのか、ユーノはその場で詠唱を始める。

俺はスライムの猛攻を避けながら魔力弾をぶち込み時間を稼ぐ。

『妙なる響き、光となれ』

接近されると何もできないのでウインチを飛ばし、無理矢理距離を取って徹甲弾タイプをぶち込む。

大穴が開くがそれだけ、いや、飛び散った肉片?が俺に向かってくる

「ちい!!」

『赦されざる者を、封印の輪に』

咄嗟にマントで防いだが、たった一回で数箇所破れてしまった。

「っかどんだけ強いんだよあの攻撃……これ俺の徹甲弾でも五発くらいい耐えるんだぞ!？」

「!?!」

スライムがビクンと跳ねる。

どうやら気が付いたな、だがもう遅い手遅れだ。

『ジュエルシード!!』

いつの間にやらスライムの背後に接近したユーノが右手を振りかぶっていた。

殴ったら封印ってどんな魔法やねん……

『封・い!?!』

「なに!?!」

しかしユーノの攻撃は、突如飛来した物体に阻まれた。

盾……いや、違う!

スライムを覆うように板状の物体が浮遊している。

「なんだありや!?!」

「僕が聞きたいよ!?!」

身の危険を感じたのか、ユーノはその場から飛び退き、俺と合流する。

板状の物体は回転しながらスライムにくっ付いて、何かを形成している。

更に森の奥から部品のような物が飛び出しどんどん大きくなる。

「何か知らんがヤバイって事は確かだな!!」

合体中は攻撃してはいけないのは勇者口ボだけの話だ。
敵メカの合体に便乗するほど俺は優しくはない。

俺は銃を構え最大威力の徹甲弾を発射した。

……が、スライムに近付くにつれて弾丸の光が弱くなり、装甲に当たる頃にはカツンと弱い音だけが虚しく響いた。

「はぁ!？」

「魔力をかき消した……?」

ユーノは呆然と呟く中、俺は素っ頓狂な声を上げてしまった。
なにせその現象には、前世で見覚えがあったからだ。

「……!!」

そしてスライムも合体が完了してしまったようだ。
駆動音を響かせ、俺達に機械的な咆哮を上げる。

「おいおい……マジかよ……」

「……」

俺は半分夢でも見ているのかと思ってしまった。
隣に居るユーノは、ただ呆然と目の前の光景を見つめている。

巨大な球体の身体

球体上部からは黒い腕のようなものが突き出ている。

球体下部には身体を支えるのだろうか？

赤いコードが無数に生えて自身を支えている。

そして極めつけは黄色く輝く三つ目のレンズ。

「Strikers」に出てきたガジェット三型が俺達の目の前に
存在していた。

お芝居は好きだがアクシデントは邪魔だから帰ってくれ（後書き）

軽く原作崩壊させていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0844ba/>

リリカルでマジカルな世界に砂漠妖怪

2012年1月5日23時48分発行